

## 令和7年度 青少年の家不登校対策事業「第1回ふれあいキャンプ」事業報告書

## 1 事業内容

(1) 趣 旨 青少年教育施設において、学校生活に悩みを持つ児童生徒を対象に、学習活動、自然体験活動、集団活動、仲間との交流を図ることで新たな自分に気付き、周囲との関係について学び、自分を見つめ直そうとする機会の提供に資する。

(2) 対 象 県内の不登校傾向が見られる小中高生 20名程度

(3) 期 日 令和7年5月31日(土)～6月1日(日) 1泊2日

(4) 場 所 香々地青少年の家

(5) 参加人数 13名 (児童生徒10名、保護者5名)

	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	合計
男子	1	1		2	1		1		6
女子	1		1	2		2		1	7
合計	2	1	1	4	1	2	1	1	13

(6) 講 師 大分大学教授 溝口 剛 氏、大分大学講師 増田 成美 氏

(7) 支援者 大分大学学生 17名

## (8) プログラム

## ①活動Ⅰ：「たからさがし1・2」

「たからさがし1」(梅ちぎり)では、初体験もあってか全員が活動参加した。採取した梅の数に差はあったものの、全員が家族用に持って帰った。誰かに喜んでもらおうとする「相手を意識した」「コミュニケーションをとる」活動としては、活動に使用することもあり見通しを持ってたためか意欲的だった。

かき氷の材料・道具を見つける「たからさがし」では、全員ががんばって暗号を解いた。ヒントを用いずに自力で解いた参加者もいて、キャンプ場で集合した後「全部集めると～」と話すと全員で「かき氷!」と和してくれた。



## ②活動Ⅱ：「梅ジュース・ジャムづくり」

梅ジュース・ジャム(イチゴ、サクランボ、グミ)を4グループに分かれて作った。自己選択・自己決定の経験をさせるため、作りたいものを選んで活動した。グミジャムのグループは時間がかかってしまったが、自信作だったのか「冷めたらおいしくなるはず」と話していた。

分け合う際には、すべてのジャムが持ち帰られた。梅ジュースを持ち帰られず残念そうにしていた。

設定された又は自分で選択した役割を果たすことがめあての活動だったが、全員がなにがしかの役割を果たし、ほかのグループの進捗を見て手伝う場面も見られた。



### ③活動Ⅲ：「別館かくれんぼ」

自己選択・自己決定で「オニ」「隠れる人」を決定した。ルールを守り、最後まで楽しく活動できた。

3回戦目は、参加者からのリクエストで実施。10人中3人が隠れる人だったが、リクエストした参加者が最後まで隠れとおせたので、大変満足げだった。

最初から「しない」・途中で休憩する・ある参加者と仲良くしたいがためにやりすぎたのか、軽い拒絶にショックで離脱する参加者がいた。集団遊びは大切な活動だが、心理的不可も大きいので参加者の選択を優先していきたい。



## (9) 事業評価

### 参加者アンケート集計（対象：1泊2日参加者13名）

#### 1. キャンプの満足度

	4	3	2	1	平均
たからさがし (12)	10	2			3.8
梅ジュース・ジャム作り (13)	11	2			3.8
別館かくれんぼ (13)	9	2	1	1	3.5

#### 2. 自己評価

	4	3	2	1	平均
活動に積極的に取り組むことができた	8	4		1	3.5
キャンプを楽しむことができた	12			1	3.8
MF や友だちと話げできた	12			1	3.8
自分のことは自分でする	6	7			3.5
MF やともだちの気持ちを考えて行動できた	7	4		1	3.1

### メンタルフレンドアンケート集計（対象：メンタルフレンド3年生15名）

	4 (変化大)	3	2	1 (変化小)
意欲	8	3		1
コミュニケーション	3	7	2	1
自己肯定感	9	2		
自立	8	1		1

## 3 成果と課題

### (1) 成果

- 「かかぢのたからさがし」として、「梅ちぎり」「暗号を解いてかき氷を食べる」を実施した。暗号は難しかったと言いに来た参加者がいた。季節の果物を料理する体験として、グミやサクランボの使用は参加者にとっても珍しかったのではないかと。初体験の活動は期待もあるのか、満足度が高かった。

集団遊びの「別館かくれんぼ」は、集団遊びを苦手とする参加者にとってはしんどかったと思われる。し

かし、リピーターの嗜好や性質を活かすための活動としては成功だったととらえている。

- メンタルフレンドと参加者のマッチングがうまく功を奏したと思われる。「意欲」を引き出し、「自己肯定感」の向上が見られたようだ。新規参加者4名もメンタルフレンドと終始笑顔で活動していた。

## (2) 課題

- 不登校の子供たちにとって、参加者同士のコミュニケーションをとることは、ハードルが高い。また、発達に不可欠な集団遊びとはいえ強制することは逆効果である。今回、メンタルフレンドアンケートでは、コミュニケーションの変容が少なかった。参加者同士のコミュニケーション力の伸長を無理にねらいとせず、メンタルフレンドや職員との交流でもよしとしたい。

## (3) 子どもたちの声（メンタルフレンドに対して）

- メンタルフレンドが一人（いいやつ）だったけど、とにかく楽しかったです。また遊べるとうれしいです。  
まじでがちでめっちゃやややや楽しかった
- なにかできないことがあっても手伝ってくれたりやり方を教えてくれたりしたので、うれしかったです。できることが増えたりしたと思います。
- いろいろしつもんにかたえてくれたのしかったです。
- シナリオ回ったりざつだんしたりあそんだりすごく楽しかったです！
- たのしかったですよ！ハムスターのえをかくね！！
- 推しがたりやボードゲームなどいっしょにやれて楽しかったです。